

ため池におけるアメリカザリガニ繁殖阻止の取組み

シナイモツゴ郷の会 長谷川政智・高橋清孝

アメリカザリガニの完全駆除や駆除による低密度化の事例は少ない。シナイモツゴ郷の会は2014年から大崎市里山のため池でアメリカザリガニ捕獲ツールの開発を始め2016年から本格的に防除活動を継続している。主に2,500m²の中規模ため池と35,000m²の大規模ため池の大小2つの試験池で実施している。この結果、在来魚のシナイモツゴ、ゼニタナゴ、ジュズカケハゼ、ヨシノボリ類などが増加した。また、二枚貝のタガイも増加傾向にある。小規模ため池では、コシアキトンボ、モノサシトンボ、コサナエといったトンボが多く確認されるようになり、その多くのヤゴは養殖用ノリ網を使ったしばづけ（人工水草）で確認できた。2021年大規模ため池では、これまで見られなかったコサナエやオオヤマトンボのヤゴが2匹ずつ確認された。また、ミヤケミズムシやトビケラの幼虫も多く確認できるようになった。

シナイモツゴ郷の会のアメリカザリガニの駆除方法は、成体と大型の幼体を主に連続捕獲装置で捕獲、小型の幼体や稚ザリを主に人工水草で捕獲、その他にも繁殖期の巣穴掘りによる抱卵雌等の捕獲、定置網による稚ザリを抱いた雌を含む移動個体の捕獲を実施している。

小規模ため池では、2016年に連続捕獲装置を5～6台設置し5～11月の捕獲でアメリカザリガニの生息数の80%程度を捕獲し、その後も継続を続けた結果、年間捕獲数は年々低下を続けている。大規模ため池では、主に堰堤沿い70mの区間でアメリカザリガニを継続して捕獲し、連続捕獲装置での捕獲数は減少している（表1）。

アメリカザリガニの繁殖力は強く、駆除圧が低いと生息数はもとに戻る。ため池のアメリカザリガニは、通常成体や大型の幼体、小型の幼体で構成されている。一般的な捕獲では、成体や大型の幼体を捕獲するもののその数は少ないと思われ、また小型の幼体の大半は捕獲されずに残されている可能性がある。そのため「駆除数<増殖数」となり低密度化にならない事がある。シナイモツゴ郷の会では、主に成体と大型の幼体を連続捕獲装置で捕獲し、同時に小型の幼体や稚ザリを人工水草で捕獲することで多くのアメリカザリガニを捕獲し駆除圧を高くしている（図2）。そのため「駆除数>増殖数」となりため池が低密度化になったと考えられる。この2つの捕獲方法は誰でもでき、一度に多くのアメリカザリガニを捕獲することが可能で、小さな労力で捕獲ができるため、マンパワー不足の駆除現場に向けた捕獲方法と言えよう。

シナイモツゴ郷の会では巣穴掘りも実施しているが、この方法は誰でもどこ

でもきる方法とは言い難く、また巣穴を掘らないで障害物に隠れて産卵する個体もいる。2020年と2021年には巣穴の数が激減したが、幼体の捕獲数は同数かそれ以上の数となった。これは成体が減少して幼体が生存しやすくなった事が一因となっている可能性がある。

これまでに開発した捕獲ツールにより、小型幼体は人工水草で、成体や大型幼体は連続捕獲装置で大量捕獲が可能となり、定置網や巣穴掘りにより抱卵雌や稚ザリを抱えた雌もある程度捕獲可能になった。これらのツールを動員して成長段階別の捕獲を徹底することにより、全体の生息数を減少させることができる。

特に、2019年に開発した簡易で安価な新型連続捕獲装置は、標識放流再捕調査により短期間に大型個体の多くを捕獲可能であることが確かめられている

(当シンポジウム、高橋「アメリカザリガニ防除戦略」)。繁殖期を迎える前の5~7月の水温上昇期に成体や大型幼体の大半を捕獲することで繁殖個体の低密度化が可能である。取り残しの成体から発生した幼体は人工水草や水際のガサガサ(サデ網採集)で捕獲可能である。

アメリカザリガニの繁殖抑止は、成長段階別に捕獲効率の高いツールで捕獲効率を高め、増殖数を上回る捕獲を可能にすることで低密度化を実現できる。さらに、低密度化を継続すると多くの在来種がよみがえり、特に人工水草を継続使用することにより在来水生昆虫の復元を促進できる。

表1 大規模ため池における捕獲数の変化(1位は切捨)

		2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
大きい ため池	連続捕獲装置	7000	5500	4530	3850	2360	
	(成体)	3790	3430	3440	2360	1470	
	(幼大)	2240	1380	860	870	500	
	(幼小)	1000	680	230	610	370	
	しばづけ等	4120	5620	3920	5240	5270	

図2 アメリカザリガニの捕獲具



図3 アメリカザリガニの繁殖抑止と低密度化のイメージ図

